

大学でのESD教育と環境教育サークル「ESDクオリア」の試み ～学生主体による持続可能な社会のための学校間・学校-地域間連携の構築～

A trial of students' activity club "ESD qualia" for University ESD and Environmental education:

Development of interactive relations between universities, schools, regions
towards sustainable developments with students at the core of movements

竹中 諒¹・内藤さゆり¹

1:岐阜大学ESDクオリア

野村典博²・川上紳一³

2:NPO法人・森と水辺の技術研究会

3:岐阜大学教育学部

Ryo Takenaka¹ and Sayuri Naito¹

1:*The ESD qualia, Gifu University*

Norihiro Nomura² and Shin-ichi Kawakami³

2:*Non-Profit Organization, Technical Research Institute of
the Forest & Waterside, Gifu, 500-8178, Japan*

3:*Faculty of Education, Gifu University, Gifu, 501-1193, Japan*

要 旨

国連・ユネスコが進める「持続可能な開発のための教育 - 10年」を受けて、各地で地域拠点が発立され、さまざまな活動が展開されている。中部ESD拠点に参加する岐阜大学では、学生サークル"ESDクオリア"を設立し、ESDに関する情報交換、情報発信を行いつつ、地域のNPO法人や地方自治体と連携して、さまざまな活動に主体的に参加してきた。本論では、設立以降現在までの取り組みを振り返り、成果と課題を考察する。

【キーワード】: ESD, 持続可能な開発, 学生サークル, 環境教育

1. はじめに

2002年に国際連合が主催した南アフリカのヨハネスブルグにおける持続可能な開発に関する世界首脳会議で、日本政府は「持続可能な開発のための教育(ESD)」を提案した。この提案は、2003年の国連総会で採択され、2005年からUNESCOが中心になって「国連持続可能な開発のための教育10年」がスタートした。この取り組みでは、国の主導ではなく、地域レベルにおける実践が重視され、ESD活動の地域拠点が認定されている。中部ESD拠点は、名古屋大学、中部大学などが計画を立案し、2007年に採択された地域拠点の一つである(羽後, 2008)。岐阜大学は、中部ESD拠点の運営委員として設立当

初からESD活動に参加している。

中部ESD拠点は、愛知、岐阜、三重にまたがる伊勢湾流域を包含する広域的な拠点である。関係者が緊密に連携して活動を推進していくため、岐阜大学では県内のNPO法人や地方自治体などととも中部ESD拠点岐阜ブランチを設立し、活動を開始した。岐阜ブランチのメンバーは月に1回ミーティングを行い、ESD活動をどのように展開していくかを議論した。その中で、大学生がこうした活動に主体的に参加し、NPO法人や地方自治体と緊密に連携して、自然保護、環境保全、エネルギー問題などについて、次世代を担う子どもたちや市民といっしょに学んでいくためのしくみを構築することが課題となっ

た。岐阜ブランチのミーティングに岐阜大学の学生が参加するようになり、それらの学生が中心になって、ESD活動を推進する学生サークルを設立することになった。そのサークル名がESDクオリアである。クオリアは、質感という意味で、「質」を意味するラテン語に由来する。体験活動を通じて、ESDの意義を肌で感じ取るという意味で、サークル活動を象徴するネーミングとした。以下、第1著者（竹中）が学生の立場として、ESDクオリアのこれまでの活動を振り返る。

「持続可能な開発のための教育の10年」の取り組みは、2014年までであり、残すところあと2年となっている。ESDについては、さまざまな大学で取り組みが進められている（例えば、比屋根，2009；鬼頭，2012；守屋，2012）。今後は、各大学での取り組みについて交流を深め、成果を共有しつつ、ESDを発展させていくことが重要である。

2. “ESDクオリア” 設立の背景

平成20年より中部ESD拠点の岐阜ブランチが発足し、市民団体やNPO役員、教育関係者による定期的な会合が岐阜大学内で開かれていた。こうした話し合いのなかで、大学とNPO法人、地方自治体や周辺大学との連携の枠組みが形成された（図1）。



図1. 岐阜ブランチの組織図（24年度）。

この場に参加したESDに関心のある学生が互いの活動について交流・連携していったことが、ESDクオリア（以下、当サークル）発足の発端であった。

したがって当サークルは当初より、特定の環境活動を主眼とした学生団体というよりも、学生間の連携ネットワーク的な要素を多分に持っていた。その後、平成21年度に学生同好会としてとして大学より公認され、以降活動の範囲を広げつつ現在に至る。

3. 活動の概要

平成24年度現在、年間を通して柱となっている活動は以下の3つである。

- (1) 地域の環境保全活動への参加
- (2) 環境学習へのスタッフ参加
- (3) 岐阜市まるごと環境フェア関連イベントの運営

(1) 地域の環境保全活動への参加

岐阜市達目洞の「達目洞保全活動」を始めとして、近隣地域の自然環境保全活動に参加している。

達目洞保全活動は「達目洞自然の会」が主催する、金華山東麓に残る里山環境の保全を目的とした活動である。もともと同地の道路建設に反対する住民運動が発端となった活動だが、現在では「人から隔離して守るのではなく、人が訪れることで保全される場所」を目指し、自治体と地域住民の共同で「ヒメコウホネ」（環境省絶滅危惧種Ⅱ類）の保護と、その生育する里山・湿地環境の保全整備を行っている。

当サークルも外来種駆除や歩道整備等、保全作業面への参加だけでなく、近隣の幼稚園児や小学生へのガイドや、稲作体験のサポート（図2）など環境教育面でも同会と協働して取り組んでいる。



図2. 達目洞・稲作体験。

(2) 環境学習へのスタッフ参加

市民団体やNPO等が主催する小中学生を対象にした環境学習にもスタッフとして参加している。特に毎年夏休み期間中に開催される小中学生を対象とした宿泊交流事業「**長良川流域子ども交流会**」は、活動規模も大きく当サークルが参加する代表的な環境学習である。

これは、長良川流域において河川環境に関して活動している市民団体、NPOでつくる『長良川流域子ども協議会』が主催しており、21年度に、長良川中流部の岐阜市で開催されたのを皮切りに、下流部の三重県志摩市・鳥羽市（22年度）、上流部の岐阜県郡上市石徹白（23年度）、郡上市大和町（24年度）で開催されてきた。

例年100名近い小中学生が参加するため、当サークルは、参加者とのアイスブレイクを兼ねたレクリエーション（図3）を企画・運営するほか、活動班では中学生のリーダーを補助する班スタッフとして各活動での安全管理（図4）や全体の円滑な運営に貢献している。



図3. レクリエーション.



図4. 活動中の安全管理.

(3) 岐阜市まるごと環境フェア関連イベントの運営

岐阜市主催で毎年秋に行われる「岐阜市まるごと環境フェア」では、環境や地域の問題に関心のある高校生・大学生の交流イベント「**学生環境会議**」（詳細は後述）と、市内の小中学校の環境学習の発表・交流イベントである「**アースレンジャー子ども会議**」（以下、「子ども会議」）が開催されている。

当サークルでは双方に企画・運営段階から関わっており、「子ども会議」では当日のクイズやテーブルごとのグループワークの司会を行っている。参加する児童生徒は「森・川・海の自然」、「生き物」、「農業・食物」、「省エネ」の4つのテーマごとの分科会に分かれ、それぞれのテーマごとの『子ども環境宣言』を自分たちの力でまとめていく。この際、サークルメンバーは分科会の補助スタッフとして、意見交換をファシリテートしている（図5）。



図5. 子ども会議の様子.

4. 学校間交流イベントとしての「学生環境会議」の企画・運営

学生環境会議は、もともと前述した「アースレンジャー子ども会議」の高校生・大学生版として発足したものであった。当サークルが関わることになった21年度以来、「わかっていると思っていることを、みんなで見つめ直す」ことを企画のコンセプトとしてきた。例年、高校生から大学院生まで、県内外から参加がある。

会議では地元で環境活動や地域活動に取り組んでいる社会人の方をアドバイザーとして招くが、講話のみの講演会ではなく、ワークショップ等を通じて企画側・参加者側が分け隔てなくテーマについて考えることを第一にしている。

日常の学校では限られた地域、限られた年代間での交流が多く、このような地域も年齢も異なる生徒・学生が対等の立場で語り合うことは極めて少ない。「ふだん話す機会がないような突っ込んだ話が出来た。」、「ぼんやりと思っていたことが話し合うことによってまとまった。」と例年好評である。漠然と考えていることでも、言葉にして、他者と交流することによって自分自身が自らの考えに気付くことが出来る。こういった話し合いの意義を感じられる場としても、学生環境会議の存在は貴重であると言える。

24年度に開催された「学生環境会議2012」(図6・7)では、小水力発電による地域活性化に取り組んでいる地域再生機構の平野彰秀氏をアドバイザーとして招き、「地域の中のエネルギー」について考えるワールドカフェ形式での交流を行った。

平野氏とともに「2032年に住みたいまち」を考える中で、エネルギー問題と自分たちのライフスタイルを見つめ直す良い機会となった。

会議後は、エクスカージョンとして愛知県豊田市に赴き、木材利用促進の取り組みや木質エネルギーの研究現場を見学した(図8)。現地で暮らしている人々から直接話を聞くことで、便利な技術や設備の導入だけでなく、それを利用する人々のことも考えた、より大きな枠組みでとらえる必要性を改めて感じた。



図6. 学生環境会議チラシ。



図7. 学生環境会議の様子。



図8. エクスカージョンの様子。

5. 学校間ネットワークとしての「未来塾2050」の立ち上げ

サークル設立以来、一連の活動を通して感じていたことは、環境に関する意識の高い生徒・学生が学べる、情報を共有できる「場」が日常の中に少ないことであった。現状では大学サークル等がこれを担っているが、世代交代や活動方針等の違いなど、個々の団体では活動を制限せざるを得ない状況が起きている。その一方で、新しく興味を持った個人にとって、環境や地域活動に独自にコミットすることは心的・物的両面から依然として高いハードルが存在する。これらを解決するために、第3著者（野村）の提案を受け、23年度から県内の高校生・大学生を中心とした学校間ネットワーク「未来塾2050」を発足させた（図9）。



図9. 未来塾2050組織概要。

これにより、定期的な情報交流（月ごとの定例会）と活動への相互参加の場が生まれ、高校生から社会人まで、世代間・地域間の垣根を越え、問題意識を共有し、持続可能な地域づくりのために、それぞれの特色を生かし連携活動を行っていく下地が出来上がった（図10）。

本サークルは団体の事務機能を担い、定例会の司会・事務と全体の連絡調整、会計管理などを担当した。

所属メンバーは幅広い年齢層から成るため、団体として活動時の交通費や必要経費の一部負担など個人のハードルを出来る限り低く抑えること、活動後にそれぞれの体験・感想をネット等も利用しながら全体にフィードバックすることなどメンバーへのサポート体制も整えつつあ

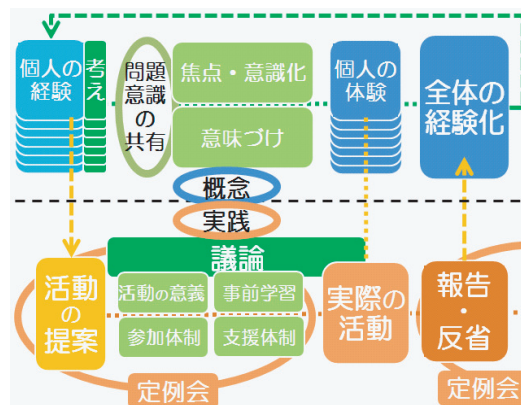


図10. 定例会の位置づけ。

る。

平成24年度で団体を設立して2年目となる。設立の大きな目的であった、学校間・世代間の垣根を越えた継続的かつ多様な交流・連携活動を年間通して企画・運営できたことは大きな成果である。連携活動だけでなく、団体としても独自に山林や河川環境の学習会を企画した（図12）。

また県や各団体などの企画スタッフとして活動することで貴重な経験を積むことができ、その中で少しずつ参加者の輪も広がりを見せている。図11に清流の国ぎふづくり県民大会でのワークショップの様子を示す。

23年度は多くの活動が岐阜県域に集中しており、他県域での活動が少なかったことは、24年度へ向けての改善点であった。この課題に対して、後日、三重大学のメンバーから「22世紀奈佐の浜プロジェクト」への参加提案がなされた。これは、木曾三川など伊勢湾の流入河川からの漂着ゴミが漁業を中心に深刻な問題となっている三重県鳥羽市答志島・奈佐の浜の現状を伝え、100年後の漂着ゴミゼロを目指す活動である。現在、東海3県のNPOや市民団体が連携して取り組んでおり、「流域」という、相互に関係あった生態系や生活文化を持つ共同体として、上流域から下流域が一体となる一つのシンボリックな活動でもある。

さっそく、24年4月定例会でこの提案に対して未来塾2050としても積極的に参加していくことが決まり、同プロジェクトの実行委員会に登録を行った。その後6月8日に実施された現地

視察会，9月8日に実施された清掃会（図13）に参加し，活動の中で三重県の学生とも交流を深めることが出来た。

各個人で実行可能な活動には自ずから制限があり，各サークル単体においても同様である。高校生や大学生も，今後，県内外や，「伊勢湾流域」，さらに「伊勢・三河湾流域圏」という広い範囲で交流・連携を深めることで，多様な見方，考え方が生まれ，さらなる活動の発展が期待される。



図11. 県民大会ワークショップの様子。



図12. 河川環境学習会。



図13. 奈佐の浜清掃活動。

6. おわりに

ESDクオリアは，ESD活動やESDに関する情報交換を行う学生サークルである。こうした活動を持続的に継続していくには，活動の趣旨を深く理解し，実践力のあるメンバーを補充していくことが必要であるが，サークルメンバーによるメンバーの勧誘だけでは人材の確保が困難であると感じられた。

平成21年度から，サークルの顧問の教員（第4著者川上）が，岐阜大学の全学共通教育科目で，「ESD入門」という科目を開講し，月1回の達目洞保全活動などの体験活動を取り入れた授業を行い，ESDの趣旨や意義を学ぶ機会を提供してきた。この授業では，地域のNPO法人などと連携して，野外活動を含むさまざまな体験活動を取り入れており，ESDクオリアのメンバーがサポーターを務めている。

この授業は半期で終了するため，受講する学生の意識を継続させ，その後もESD活動に積極的に参加していくという主体性を育むうえでは不十分であることがわかった。そこで，平成24年度からは，後期科目として「ESD実践研究」を開講することにし，年間を通じて，ESDについて体験的に学べる場を設定することで，受講者の中からESDクオリアのメンバーとして継続的に活動できる学生の確保を目指している。

大学改革が急激に進行しているなかで，大学と地域との連携強化の必要性が高まっている。学生が地域にでていき地域の方々と課題を共有しつつ，体験的に学びを深めていき，こうした活動が地域連携の成果として結びついていくなしくみ作りは，今後，よりニーズが高まっていくものと考えられる。ESDクオリアの活動がこうした地域に根ざした大学教育のあり方のモデルとなるよう，これまでの活動を発展的に継承していきたいと考えている。

謝辞.サークルの活動に当たっては財団法人学生サポートセンターから「第9回学生ボランティア団体支援事業」助成金を，岐阜大学より以下の助成金を充当させて頂いた。

平成22年度活性化経費（地域連携：学生）「NPOが主催する『森・川・海のつながりをテ-

マとした河川環境学習』における学生ボランティア事業」

平成23年度活性化経費（地域連携：学生）「NPOと協働で行う『地域の未来を担う若者交流塾』の企画・運営」

平成24年度活性化経費（地域連携：学生）「岐阜県内外の学生による『伊勢湾・三河湾流域圏に於けるESD活動』の展開」

また学生環境会議の実施に当たっては、岐阜市まるごと環境フェア実行委員会ならびに環境市民ネットワークの全面的なバックアップと、岐阜市役所のご協力によって成り立っている。ここに記して感謝いたします。

引用文献

- 羽後静子（2008）第1回伊勢・三河湾流域圏ESDフォーラム報告：生物の多様性と文化の多様性のつながりを考える．貿易風-中部大学国際関係学部論集-，第3号，346-353.
- 比屋根哲（2009）大学教育とESD，環境教育，18，68-72.
- 鬼頭宏（2012）上智大学における環境教育・ESDとその課題：環境リテラシーから環境人材育成プログラムへ，上智大学教育学論集，No.46，70-73.
- 守屋真二（2012）大学におけるESDの再定義と普及に関する考察，目白大学高等教育研究，No.18，27-36.

